

姜立綱『中書楷訣』の現存版本について

李 松 樺

はじめに

第一章 先行研究

第二章 漢籍『中書楷訣』

- (一) 萃英堂版本の所蔵と情報
- (二) 萃英堂版本の内容について

第三章 和刻本『中書楷訣』及び漢籍との比較

- (一) 国文学研究資料館蔵『中書楷訣』
- (二) 和刻本『中書楷訣』の種類と推論
- (三) 漢籍との一致点
- (四) 漢籍との差異点

第四章 研究結果及び結論

付録

参考文献

はじめに

明代の浙江省は、水陸交通の発達によって富裕な地域経済の基礎を築き上げた。それに従って地域の文化勃興の基盤を作った。特に書学において、宋元の先賢が地域の書学文化を積み上げた上に、新しい書法の風潮を作る人物が次々に登場した。姜立綱は、そのうちの代表人物である。先賢の研究によって、現存している姜氏が著した『中書楷訣』の版本は三種類がある。すなわち安徽省図書館の萃英堂刻本、

上海市図書館の珂羅版抄本、日本尚友齋版本である。しかし、稿者は先行研究によって、近年日本で新しく公開された和刻本の『中書楷訣』（一冊）があることを見出した。しかし、この版本の様式や内容などについての研究と分析は見られない。そこで和刻本と安徽省図書館の萃英堂刻本を校合したところ、少なからず差異があることに気づいた。

本稿では、この差異を通じて、漢籍の受容と和刻本の変容の視点から考察を試みる。延いては明代版本書法の解明に繋がりたいと考えている。

第一章 先行研究

姜立綱（一四四四～一四九九）、字は廷憲、号は東溪である。官歴は中書舎人、太長少卿に至った。

先行研究によれば、近年来、中国内外の専門家が姜立綱及びその周辺に関する研究文章が続々と登場している。その中で、特定の視点による研究や集大成の著作がある。例えば、二〇一六年に李凭は、シンガポール国立大学図書館に収蔵している『史記』について詳細に研究した。李氏は歴史文献及び書跡を考証して、抄本の書写者は「明朝弘治年間書辦、太少朴少卿姜立綱」¹であると結論した。同年、陳佐は十五年間の研究を踏まえて、『姜立綱書法文献研究』²という著作を出版した。内容は、姜立綱の「著述・詩文遺稿・年譜・勅諭・家族歴史・歴代集評・学苑抜粹・メディア視角・民間伝説・付録」という十の項目から展開し、それらに関するすべての資料を収集して整理した。現在、この本は姜立綱に関する研究の最も全面的な

資料であると言える。稿者は日本蔵明代古籍の資料を整理している際に、陳氏の著作に和刻本『中書楷訣』に言及していることに気づいた。

陳氏は和刻本『中書楷訣』について、現存の資料に基づき、版本の情報と収蔵地を述べている。それが参考とした資料は、昭和五十一年（一九七六年）に出版された『和刻本書画集成』³の縮影印版本である。

本稿は、稿者が二〇一九年に収集した日本蔵『中書楷訣』版本の資料を基盤として執筆するものである。本稿を通じて、陳氏の『尚友齋藏本「中書楷訣」』に見える誤謬を訂正しながら、漢籍と和刻本との差異も指摘する。

第二章 漢籍『中書楷訣』

陳佐の研究結果によれば、現存する『中書楷訣』の版本は、「安徽省図書館の萃英堂刻本・上海市図書館の珂羅版抄本・日本尚友齋版本」の合計三種類である。その中で、安徽省図書館の萃英堂刻本と上海市図書館の珂羅版抄本の版本は漢籍である。安徽省図書館の萃英堂刻本の版本は二〇〇八年に『第一批国家珍贵古籍名录図録』に収録され、縮印版として出版されたが、上海市図書館の珂羅版抄本の版本は、今日まで公開された情報も考証の文章もない。従って、稿者は現存の文献資料と図録に基づき、安徽省図書館の萃英堂刻本の版本について検討を加えたい。

(一) 萃英堂版本の所蔵と情報

萃英堂刻本『中書楷訣』についての収蔵の記述は、中国国内の安徽省図書館に見えない。この版本は、二〇〇八年二月二〇日付『安徽省古籍保護工作簡報（第五期）』⁴によれば、正式に『第一批国家珍贵古籍名录図録』に収録された。具体的な記述情報は以下の通りである。

〇一八三九 中書楷訣一卷（明）姜立綱撰 明弘治十八年（一五〇五）休邑萃英堂周樂軒刻本。框の縦一七・五センチメートル、横一一・六センチメートル。列の文字不等、白口、四周单边、安徽省図書館館蔵。⁵

(二) 萃英堂版本の内容について

『第一批国家珍贵古籍名录図録（第七冊）』に収録される安徽省図書館蔵『中書楷訣』の縮印版は、実際には二葉がある（図1）。右側の第一葉は『中書楷訣』の序文であり、左側の第二葉は「正文」であると推論する。

第一葉は七欄の様式である。右から第一欄の冒頭は「中書楷訣序」であり、その下に「寓休邑萃英堂周樂軒梓行」と二列の細字がある。具体的な記述は以下の通りである。

中書楷訣序 寓休邑萃英堂周樂軒梓行

文章雖好、書札為先、欲知字值千金、須用心通八法、点如瓜子、含万象之光、撇似屠刀、有斬千牛之勢、捧陽鳥而出海、驅渴馬以奔泉、直擬懸針、穿破九霄之雲霧、画如横劍、劈开太極之。

第一葉に二顆の印章が鈐されている。「□□□璋」と「安徽省図書館印」である。一顆は紙面の破損の関係で文字が読み取れない。破損していないもう一顆からすると、縦横一・五センチメートルである。もう一顆は、縦横三センチメートルである。落款に「萃英堂周樂軒」と刊刻されることから、「周樂軒」という「書林」、則ち出版者の記載を発見した。文献における原文は以下の通りである。

三二七 周樂軒

周易本義四図一卷 宋朱熹撰 明嘉靖四十五年書林周樂軒刊 第四卷后有「周樂軒」牌記⁷

第二葉の内容は、二つに分かれる。まず「永」字の全体的な構造から始まり、下に詳細な注釈を付されている。原文は以下の通りである。

禁経云、永字八法、起于隸字之始、自崔、張、鍾、王前輩老先生伝授一字該于万字、墨道之最要也。

禁経とは、張懷瓘撰『玉堂禁経』のことである。

第三章 和刻本『中書楷訣』及び漢籍との比較

現存する『中書楷訣』の版本は三種類あり、そのうち和刻本は「日本尚友齋蔵本」にしか見えないと陳佐は指摘する。その根拠は、『和刻本書画集成（第二輯）』に収録される縮印版『中書楷訣』である。

しかし、この縮印版『中書楷訣』は、原本の二葉をまとめて一葉にしている。稿者が縮印版『中書楷訣』版本を計測したところ、「縦は一・四センチメートル、横は一五・一センチメートル」である。第一葉は「縦は一〇・センチメートル、横は七センチメートル」である。

なお、『和刻本書画集成（第二輯）』の「解題」には、「尚友堂」の『中書楷訣』の由来及び基本的な情報を記述されている。

中書楷訣 舊題明姜立綱撰 松下辰（鳥石）書 享保二十年（一七三五）七月江戸文刻堂西村源六刊本 大一冊

永字八法に始まり、八法の順と八病を述べ、楷書の筆法を説く。字画は善く洪武正韻に従っていると。姜立綱、字は廷憲、號は東溪。楷法に巧で、中書舍人となり、太常寺卿に至った。又書を能くした。

嘉靖中の金陵の陳氏刊本に據ったが、和刻本の底本は、源君嶽の序によると、原本を摹寫して鈴木蘭臯に與へたものであると。後印本は、刊記の下方を「東叡山池之端仲町／須原屋伊八」と改刻。⁹

この記述によつて、「尚友堂」版本の由来や日本での復刻など、わずかなことがわかる。しかし、原本の状況や、装丁などについては不明である。

(一) 国文学研究資料館蔵『中書楷訣』

国文学研究資料館蔵『中書楷訣』版本¹⁰は、番号五四―三〇二、前収蔵者は「国文研松野」¹¹、一冊、実本（内版を含む）の縦は二七・五センチメートル、横は一八センチメートル、内版の縦は二二・六センチメートル、横は一五センチメートル

である。装丁は、外部は紺青の紙に包まれ、冊頁の様式で製本する。各葉には、小さな破損や虫食いの部分が多くある。内版の印刷様式は、四周単辺単魚尾である。

「鈴木蘭臯」から「唐詩連選」まで、合計六〇葉である。その中で、第一葉から第二葉までは「源君岳」という日本人が「享保乙卯中秋前一夕」に書いた文章である。第三葉から第六葉までは、姜立綱が書いた文章である。第七葉から第五十二葉までは、『中書楷訣』の正文である。第五十三葉は、金陵（現在の南京）の陳権¹²が「嘉靖乙丑三月」（西暦一六五六年三月）に書いた跋文である。第五十四葉は、「江府書肆」の「西村源六」が発行する情報である。第五十五葉から第六十葉までは、「江府書肆」の販売目録である。特に第六十葉には赤い紙が貼ってあり、内容は「国文研究資料館一五〇一六〇、平成一八年一月一三日（二〇〇六年一月一三日）」である。

(二) 和刻本『中書楷訣』の種類の推論

現在日本に蔵される姜立綱『中書楷訣』和刻版本は二種類ある。一つは、陳佐が『和刻本書画集成（第二輯）』を引用して記述した「尚友齋」の『中書楷訣』である。もう一つは、稿者が見出した国文学研究資料館蔵『中書楷訣』である。この二本にはどのような差異があるのか。以下に推論を記述する

(三) 漢籍との一致点について

『和刻本書画集成（第二輯）』の『中書楷訣』の紙面は縮印版であるが、紙面の文字が明白である。国文学研究資料館蔵『中書楷訣』原本は、完本である以外に、紙面に印刷した文字や墨色の濃淡などを考察できる。稿者が二本を比較した結果を以下に纏めた。（表1の「位置（葉）」の部分は、稿者が考察した国文学研究資料館の『中書楷訣』の葉数であり、二本の比較基準になる）。

表1の番号1、第二葉における落款の部分「享保乙卯中秋前一夕源君岳書于佛精舍」と二顆「法座空」・「君岳」の鈐印は一致する。しかし、『和刻本書画集成（第

二輯』の『中書楷訣』は縮印版のため、鈐印と印版の数値を測ることができない。表1の番号3、第五十三葉「是歲嘉靖乙丑三月望日金陵陳權識」という題跋は二本とも同じである。

表1の番号4、第五十四葉「享保二十年乙卯初秋日江府書肆本町三丁目西村源六発行」は二本とも一致する。但し、国文学研究資料館の版本には「中山家蔵書」という印章がある。

以上から、二本の和刻本は同じ木版から印刷された可能性が高く、しかも「江府書肆」を介して販売されたことが判明した。

また、第五十四葉の「西村源六発行」も、二本とも同じである。よって、『姜立綱書法文獻研究』に見える「西村源久発行¹⁾」は錯誤である。「久」ではなく、正しくは「六」である。

(四) 漢籍との差異点について

比較した『中書楷訣』の版本は、漢籍は『第一批国家珍貴古籍名録図録』に印刷された版本であり、和刻本は「国文学研究資料館蔵」の版本である

図表を通じて、『中書楷訣』の漢籍と和刻との差異は以下の四点になる。

- (1) 番号1。『中書楷訣』の序文の部分における字体について。漢籍は明代初期から中期¹⁴⁾に至るまでの風格だと見える。和刻は改刻した楷書である。
- (2) 番号1。著者名について。漢籍は「中書楷訣序」とあるが、和刻本は「序」を消して「姜立綱著」を加えた。さらに、和刻は訓読みの注を付し、文字の大小も変えた。
- (3) 番号2。「永」字の筆画の解説について。漢籍は和刻より詳しい註解がついている。「永」の下にある「禁経云」は、和刻では前頁に移動した。原本（漢籍）の排列様式を変えた。

- (4) 番号2。「禁経云」の部分について。漢籍と和刻とに大きな差異がある。漢籍の原文は「禁経云、永字八法、起于隸字之始、自崔、張、鍾、王前輩

老先生伝授一字該于万字、墨道之最要也」であり、和刻本の原文は「禁経曰、永字八法、起于隸字之始、自崔、張、鍾、王前輩老先生伝一字該万字、頗為墨道之要」である。

二つの原文について、「永字八法」は「隸字」から誕生して、「八法」が「墨道」の核心内容だとわかる。すなわち、この「八法」は書家にとつて、従うべき基本的なものだと考える。しかし、具体的な言論を述べている時に、差異の内容が生じた以下のように示す。

- 1、漢籍…「禁経云」、和刻本…「禁経曰」
- 2、漢籍…「伝一字該于万字」、和刻本…「伝授一字該万字」
- 3、漢籍…「墨道之最要也」、和刻本…「頗為墨道之要」

まず1点目について、「禁経云」の「云」と「禁経曰」の「曰」はいずれも「説く」、あるいは「話す」の意味である。他の復刻漢籍からみると、漢籍の「云」が「云々」、または「曰」に変更した情況は普通である。

次に2点目、3点目について、「伝一字該于万字」と「伝授一字該万字」及び「墨道之最要也」と「頗為墨道之要」は、和刻本の部分がカタカナの注釈が付いているので、カタカナを加えて実際の原文にする。例えば、「前輩老先生伝一字該万字ヲ頗為ニ墨道之要」は、「ヲ」が「なる」あるいは「作為」の意味であり、「ニ」が「における」の意味である。この原文から見れば、漢籍の原文の意味と一致する。

なお、陳佐『姜立綱書法文獻研究』は、「伝一字、該万字、頗為墨道之最要¹⁵⁾」と記述する。正しくは「伝一字、該万字、頗為墨道之要」である。

第四章 研究結果及び結論

現存する明代の姜立綱が著した『中書楷訣』は、漢籍と和刻本に分けると、合計四本がある。具体的な書誌情報を表4に示す。

以下に、古籍版刻学と書道史学の領域に分けて、必要な版本について論じる。古籍版刻学領域。この研究は主に古籍の字体・版本様式・紙面・墨色などの方

面から考察と考証する。従って、国文学研究資料館の版本が最適の研究対象である
と考える。しかし、『和刻本書画集成(第二輯)』の第一葉を参考にしなければ、
より良い研究はできない。この第一葉は、「封葉」である。これを借りて、日本国
文学研究資料館の版本に加えて研究すると、より適切な和刻本『中書楷訣』の研究
になる。

書法史学研究領域。この研究は主に、歴代の書人・書跡・書論という三つの方
面からの研究である。従って、『和刻本書画集成(第二輯)』の版本は研究の要望
に合うと考える。特に、「書人」に対する研究は、本作の姜立綱以外に、日本人の
「源君岳」と跋文の「陳権」も研究する価値があるう。「書跡」の研究に対して、
日本人の「源君岳」が書いた行書は墨跡に比べて一致するか否か、彼が書いた行書
は墨跡から木版に印刷したのか、あるいは直接に木版に書いたのかなどの問題につ
いて研究する価値がある。「書論」の研究について、第三葉から第七葉まで及び第
七葉から五十四葉まで、いずれも姜立綱の書論に限定されるものでないことは勿論
である。従って、書法史学研究領域に対する最も良い研究版本は『和刻本書画集成
(第二輯)』の版本だと判断するが、「書跡」を研究する場合に、字体や空間の考
察や筆法の比較などを正確に考察できるため、日本国文学研究資料館の版本を研究
対象にした方が良いと考える。

以上の研究領域以外に、姜立綱の『中書楷訣』に対する研究は、歴史学や、文学、
言語学などの学科に及んでいる。未来、各領域の研究の文章に従って、全面的な姜
立綱の『中書楷訣』の研究理論体系を作ることができる。

付録

図 1

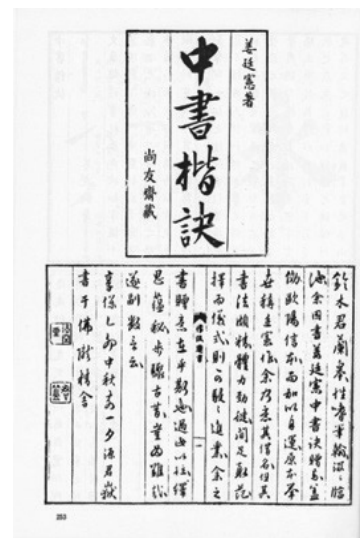


図 2



表 1 漢籍との一致点

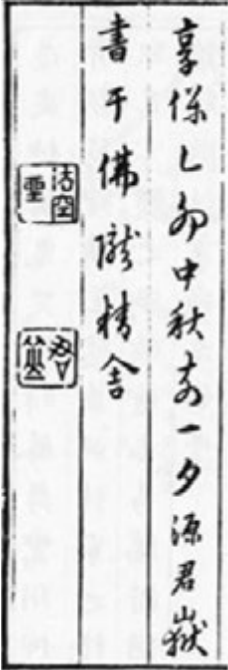
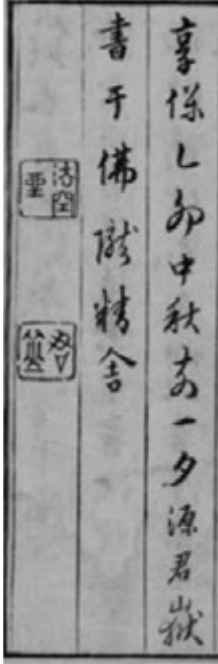
位置 (葉)	国文研究資料館	和刻書画集成	番号
第二葉			1
第三葉	<p>中書楷訣</p> <p>姜立綱著</p> <p>文章雖好書札為先欲知字值千金須用心通八法點如瓜子含萬象之光捺似屠刀有新千牛之勢榜陽鳥而出海驪渴馬以奔泉直擬懸針穿破九霄之雲露畫如橫</p>	<p>中書楷訣</p> <p>姜立綱著</p> <p>文章雖好書札為先欲知字值千金須用心通八法點如瓜子含萬象之光捺似屠刀有新千牛之勢榜陽鳥而出海驪渴馬以奔泉直擬懸針穿破九霄之雲露畫如橫</p>	2
第五三葉	<p>中書楷訣跋</p> <p>姜公書法端莊嚴肅均倖稱載其體格悉厚沈良規而自成一派其字無遺洪武正額而不失六法是以國朝崇為孔子所謂今用之者也學者不從此而誰從哉是本尤為精妙因刻之使學者知所入門是歲嘉靖己丑三月望日金陵陳權識</p>	<p>中書楷訣跋</p> <p>姜公書法端莊嚴肅均倖稱載其體格悉厚沈良規而自成一派其字無遺洪武正額而不失六法是以國朝崇為孔子所謂今用之者也學者不從此而誰從哉是本尤為精妙因刻之使學者知所入門是歲嘉靖己丑三月望日金陵陳權識</p>	3

表 2 漢籍との差異点

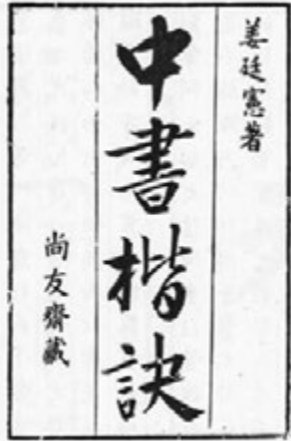



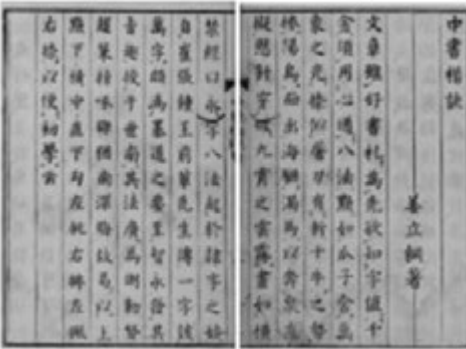

位置 (葉)	国文研究資料館	和刻書画集成	番号
封葉	なし		1
第一葉			2
第五五葉～第六〇葉		なし	3
第三葉～第四葉			4

表 3 版本様式の比較

位置 (葉)	和刻本	漢籍	番号
第三葉			1
第六葉 ~第七葉			2

表 4 『中書楷訣』 版本

備注	所蔵/出典	出版記述	刊刻時間	刊刻地域	漢籍/和刻本	書名
全本公開していない	安徽省図書館蔵、『第一批国家珍貴古籍名録図録（第七冊）』	周樂軒	明弘治十八年（一五〇五）	中国	漢籍	『中書楷訣』
手抄本	上海図書館蔵					
縮印	『和刻本書画集成』、尚友齋蔵		享保二十年（一七三五）	日本	和刻本	
影印本（全本）	国文学研究資料館					

参考文献

- 1 李凭『シンガポール抄本史記通考』、『歴史研究』中国社会科学杂志社二〇一六年十二月版、第五九頁。
- 2 陳佐『姜立綱書法文獻研究』、浙江聯合出版社二〇一六年版。
- 3 『中書楷訣』、西川寧、長澤規矩也『和刻本書画集成（第二輯）』、『和刻本書画集成（全十二輯）』汲古書院一九七六年版、第二五三頁第二六六頁。
- 4 安徽省古籍保護中心編『安徽省古籍保護工作簡報（第五期）』二〇〇八年二月二〇日、第三頁。
- 5 中国国家図書館、中国国家古籍保護中心編『第一批国家珍貴古籍名録（第七冊）』、『第一批国家珍貴古籍名録（全八冊）』国家図書館二〇〇八年版、第七頁。
- 6 同上、第五七頁。
- 7 杜信孚撰、周光培、蔣孝達參校『明代版刻總録（第三冊）』、『明代版刻總録（全八冊）』江蘇広陵古籍刻印社一九八三年版、第二〇頁。
- 8 『第一批国家珍貴古籍名録（第七冊）』、第五七頁。
- 9 『和刻本書画集成（第二輯）』の「解題」の部分。頁数が表示していない。
- 10 新日本古典籍総合データベース：
<https://kotenseki.nijl.ac.jp/app/1/#%2Fs1%2Fs1%2F%7B%22keyword%22:%22%E4%B8%AD%E6%9B%B8%E6%A5%B7%22,%22sortFile1%22:%220.%22,%22sort10rder%22:%22asc%22,%22sz%22:20,%22f%22:0%7D>
- 1 国文研松野・松野阳一（一九三五―二〇一八）、日本文学者、東北大学名誉教授。
- 陳権：一五二五―一五六六。
- 『姜立綱書法文獻研究』、第八頁。
- 1 版刻時代区分：明代初期は洪武から弘治まで、明代中期は正徳から隆慶まで。
- 1 参照：黄永年『古籍版本学』江蘇教育出版社二〇〇五年版、第一一九頁。
- 1 『姜立綱書法文獻研究』、第三頁。